夏の大三角形

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏の大三角形

【Ｎコード】
Ｎ０２３８Ｔ

【作者名】
武倉悠樹

【あらすじ】
アルタイル、デネブ、ベガ。３つの恒星が夜空に大きな三角形を浮かび上がらせる季節。
中学三年である、鷲尾光。白鳥巧。琴月茜。三人は期末試験を控え、夏休みを前にしていた。来年の春からは高校生。少年から青年へ。中学生から高校生へ。そして幼馴染から……。
夏の夕暮れ。オレンジ色に輝く校舎が、直に夜に包まれていく中

で、ゆっくりと変わっていくものと、変わらないもの。

：1

日曜日。夕方の教室。

教室の机や椅子が橙に染まる時間。遠くに聞こえていた吹奏楽部の練習は先ほど止んだ。あと、残るのは野球部の練習の音と、教室を飛び交う二人の男子の愚痴のみ。

「おい、ついに吹奏楽部のＢＧＭもなくなったぞ」

「そうだな」

「いま何時だろうな」

「そこに時計があるんだから、見ればいいだろう？」

時間を訪ねられた男子は作業の手を止め、ナイフを持った右手で黒板の上の時計を差した。

「怖くて見れないんだよ、鷲尾君。どうしよう、今が六時とかだったら。日曜日の朝から呼び出され、作業に明け暮れ一日。気がつけば六時だったなんて事実を知ってしまったら僕は一体どうすればいいんだい？」

鷲尾と呼ばれた男子はすっくと立ち上がった。彼は鷲尾輝（ワシオヒカル）。年の頃は十四、五か。立ち上がる勢いでさらりと揺れる前髪は艶の良い黒。細身の面立ちに、湛えた表情は怒り。アンダーリムの銀縁メガネの奥の瞳は怒りに燃えていた。

ヒカルは怒りを精一杯押し殺した。怒りに身を任せれば、手にしたナイフを力一杯投擲してたところだ。

「タクミ。ナイフをお前の眉間に投げなかった俺の堪忍袋の緒のチタン合金並の頑丈さに感謝して、泣きながら手を動かせ。
今から急げば、俺たちの日曜日は五時間は残る」

「ヒカル。お前の忍耐力には感謝するが、その発言によって頭の良い俺は、現時点で早くともすでに六時は回ってることを悟ってしまった。やる気がマイナス十万飛んで四千二百ぐらいだ。どうしてくれる？」

「いや、飛んでねぇよ、それ、」律儀に突っ込みながら、ヒカルは続けた。

「それに知らないのか？　人間のやる気はプラスマイナスの限界値が三万五千なんだぞ。下限値を越えると、余った分は上昇に転じる。つまりお前のやる気は今三万四千二百。おそらくお前の人生でベストの数値だよ。
すごいな。流石だよタクミ。カッコいい！　惚れちゃう！」

「ちなみにチタン合金の強度限界は？」

「そろそろ限界だな」

「そうか、そいつは困った。チタン合金を長持ちさせる秘訣はなんかないか？」

「黙れ。そして手を動かせ。それだけだ」

軽口でヒカルを怒らせていた、もう一人の男子、白鳥巧（シラトリタクミ）はその発言でさすがに口をつぐんだ。

冷たくとがった印象を放つヒカルと対照的に、タクミは人好きのする顔をこね上げて、釉薬に爛漫さを塗って焼き上げたような造作の顔の青年だ。

決して太っているわけではないのだが、丸い、という印象がタクミにはつきまとう。それは目も口元も常に笑っているからだ。黒髪に所々混じった茶髪も、その明るさを演出するのに一役も二役も買っていた。

冗談の応酬が終わり、二人は再び手を動かす。

ヒカルとタクミが休みを返上してまで励んでいる労働。それは七夕用の笹の飾り付けと短冊の用意だった。一学年六クラス。その三学年分すべての。

事の始まりは昨晩に遡る。来る七夕に向け天体観測に興じようと、突如思い立ったタクミの暴挙に端を発していた。

土曜日の夜。静まり返った校舎に、タクミは単身忍び込んだ。夕方のうちに見回りの教師の隙を縫って、一度は戸締まりの確認された天文部の部室の鍵と一階のトイレの鍵を開けておいたのだ。そうして、タクミは盗みを成功させた。

その後調子に乗り、とりあえず勝利の余韻を自慢しようと、強引にヒカルを夜の学校に呼び出した。

夜間の突然の電話に憤りを覚えたヒカルはしかし、しぶしぶ自転

車に跨る。無視したほうが、後で面倒になると知っていたからだ。

夏の夜、小汗を流し学校に着いたヒカルを待っていたのは、警報装置をならしてしまい御用になったタクミと、ヒカルを共犯扱いする、生活指導で当直の番を担っていた体育教師だった。

一時間ほどの正座による足の痺れと、精神的疲労感たっぷりのお説教を頂き、ようやく帰ろうとした二人に言い渡されたのはさらなる苦行だった。

こうして、今行ってる休日出勤を余儀なくされた。

用意された子供の胴ほどもある竹を、鉈と金槌で割る。細くなった竹の形をナイフで整え、余分な枝を落とす。それを十八回繰り返した時点で九時から始めた作業は昼休みと幾度の小休憩を挟んで二時を迎えていた。

今は、紙飾りを作る作業と、七百枚強の短冊を作る作業を分かれて行っていた。

「なぁ、ヒカル？」

タクミが黙って、作業に専念していたのは、結果五分程度だった。

「もう分かった。お前に、黙れ、は無理なんだな。喋りながらでも良いから、手だけは止めるな。」

ヒカルはそう言いながら、本心ではよく五分も保ったと思っていた。幼稚園から十年のつきあいになるタクミの事をヒカルはよく知っていたからだ。

ついでに言えば、飽きっぽく不真面目なタクミが今日は休憩の時を除いて一度も手を止めていないことも。ヒカルの「手を休めるな」の発言に、いつもなら「なんだと～、このタクミ様の頑張りが～」と言い出すはずのタクミがなにも言わないことも知っていた。

それが、口が軽いがゆえに、自分の言葉も軽くなってしまう事を知っているタクミの、不器用な謝り方だということも。

やれやれと、ヒカルはタクミの雑談に応じながら作業を進めた。

：2

「なぁ、ちょっと休憩入れね？　まだちょっとかかるだろ」

淡々と作業を続ける二人の間。タクミが、わりと真剣な口調でつぶやいた。

「ま、いいか。ここまできたら少しくらい遅くなっても一緒だな」

紙切りを押すだけのヒカルはそこまで疲れていなかったのだが、少し考え、タクミの提案を受けた。

「よっしゃ！　休憩！」

背骨を鳴らしながら伸びをするタクミ。大きく欠伸をするヒカル。一時間ぶりの休憩だ。

タクミはストレッチをしながら長時間の同じ姿勢で固まった体を解しながら、教室の後ろへ。

「いやー、しかし、あれだな。自分達の事ながら、これはよくやったな、おい」

目線の先には後ろのロッカーに立てかけられた十八本の竹。その内大半の、柳のようにしなだれる笹には、きらびやかな装飾が施されていた。

ちなみに休みの日という事もあって一般教室でもある二人の作業場はエアコンが利いていなかった。文字通り、二人の半日の汗の結

晶である。

「なぁ」

壮観な光景を前にしたタクミが不意に口を開いた。

「短冊、書かね？」

「ん？　短冊？」

「そう、短冊だよ。明日七夕じゃん。それに先駆けてさ。短冊一番乗り。御利益ありそうだべ！」

「そうだな。それぐらいの役得があってもいいかもな。よしちょっと待ってろ」

そう言うとヒカルはすぐに、筆箱を取り出した。

「ほら、ペン」

ヒカルは黒の油性マジックをタクミに放り投げた。

「短冊はその辺にいくらでもある、好きなの使え」

そう言いながら、自らもペンと短冊を手に取った。しかしいざ、書こうか、というところでヒカルのペンが止まる。

どうしたものか。ヒカルの思考は固まった。タクミの手前心の底の望みを書くことははばかられたのだ。

しかし、嘘というか、自分の本音を誤魔化した願い事を短冊に書いて何の意味があるのだろうか、ともヒカルは思った。

別に、七夕の短冊に願いを書いたところで、望みが実現するとは露ほども信じてはいない。だから問題はそこじゃなかった。本音を隠せば、それで自分の願い事に対する姿勢、真剣さが疑われるような気がしたのだ。

「ん？　どうしたヒカル。俺はもう書けたぞ。まだ書けないのかよ」

そう言うとタクミはヒカルの短冊をのぞき込む。

「おまっ！　おいっ！　何だよ見んなよ！」

「見るなもなにも、短冊ってのは飾るもんだぞ？」

「でも、あれだろ、なんか。おまえ、書いてる途中とかはだめだろ！」

ヒカルは願い事の書き出しの三文字だけが書かれた短冊をタクミから遠ざけた。

そうしてから、それが愚行だとヒカルは気づく。これではタクミを煽ってるだけにしかならないからだ。

餌を目の前にぶら下げられた獣の様に、短冊に食いつくかと思われたタクミは、しかし、短冊を追わない。代わりに、新たな短冊とペンを手にし、ニヤニヤとヒカルを見つめていた。

「書いてやるよ。俺が。お前の短冊。

任せろ、幾度となく写してきたお前のノート。筆跡偽造も完璧だ！」

「は？　なに言ってんのお前、やめろって！！」

ヒカルが詰め寄りタクミを制止しようとしたところで、すでにタクミは素早く短冊を書き終えていた。早業である。

つかみかかるヒカルに、タクミは短冊を突き出す。

ヒカルは突如眼前に突きつけられた文字列を一瞬では理解できなかった。あわててピントを合わせ、読んだところで、頭を置き去りにして感情の命ずるがままに体が動いた。

「どぅあらぁぁ！！！」

拳一閃。右足を勢い良く踏み込み、体の軸の回転に、握力、腕力、背筋力の精一杯を乗算した破壊力が込められたフックボディーブローをタクミのわき腹に叩き込む。

「おふぅぐ！！！」

肝臓を打ち抜かれたタクミは、言葉に成らないうめき声をこぼし、体を折り畳む。にやけ顔に刻まれた苦悶の表情に反し、右手に掴んだ短冊を、それでもタクミは手放さない。「琴月茜とつき合えますように。鷲尾輝」と書かれた短冊を。

「ぶえっっっほ！　な、にすんだ、よ」

咽び、息も絶え絶えにヒカルを睨み上げるタクミ。しかしその視

線を迎えたのは最低でもマイナス三百℃を上回らないであろう、絶対零度の向こう側の眼光。

「ヒカル君？　チ、チタン合金は？」

「木っ端微塵だな」

間を置かず、にこりともしないままにヒカルは繰り返す。

「ああ、木っ端微塵だ」

タクミはヒカルと目を合わさないように明後日を向きながら、せわしなく視線を泳がせる。

「えーっと、その、だな、ヒカル？」

「竹を割れるんだから、頭蓋骨も難しくないだろう」

そう言いながら、ヒカルの視線の先にタクミは居ない。あるのは鉈と金槌。

それを持ち、タクミに向き直ると、そこに待っていたのはヒカルの怒りをさらに煽る光景。笹に「鷲尾輝の恋の願い」を結びつけているタクミの姿だった。

「お前、本当に死にたいのか」

少し声が震える。それほどまでにヒカルは怒っていた。

それと同時に、沸騰しそうなヒカルの脳裏はしかし、理解してな

い訳ではなかった。つまり、この怒りが、あの短冊の中身が図星であることに対する照れ隠しからきているのだと言うことを。

そして同時にもう一つ。実のところヒカルよりよっぽど聡く、つきあいも長いタクミがヒカルの胸の内に秘めた懸想に、そして怒りの正体に気づいてないはずがない。

そう思うと、次第に照れ隠しの怒りは引き、純粋な疑問が沸き上がる。

「なんで、だよ？」

ヒカルの口からその一言だけが漏れた。しかし「なんでそんな短冊書くんだよ、お前だって」と、ヒカルによぎった思いは声にならず宙に霧散する。

ヒカルは、タクミにアカネへの思いを打ち明けたことはなかった。それは三人が幼なじみで、なによりタクミの中にあるアカネへの想いにヒカルは気づいていたからだ。

お互い様なのだ。互いに、互いの胸の内に気づいていた。だから互いに沈黙を守った。それが暗黙の了解だった。はずだ。

それをタクミは破った。

ヒカルの手から鉈と金槌がこぼれた。

カランカランと鳴る音が、黄昏時の教室に響く。

「タクミ！　お前だって！！」

照れ隠しの怒りなどとうにどこかへ言ったヒカルの叫びが沈黙を裂く。いや、いまや、違う怒りがヒカルの中に沸々とその姿を大きくしていた。

「オッケー！　ストップだ。一端タンマな、ヒカル！」

決してお茶らけた口調ではなく、タクミは応える。ヒカルの目をしっかりと見据えたまま。

「ジュース。飲み物買ってくるから。話はそれからだ。な？」

そう言って半ば呆然と立ち尽くすヒカルの背を向けたタクミは、早足で教室を後にした。

ヒカルは、感情のぶつける先を失ったまま、夕暮れの教室に一人取り残された。

：3

廊下に差し込む西日が眩しい。

ヒカルを教室に置き去りにして、タクミは夕焼けに沈みゆく廊下を一人歩く。

自販機は食堂か、学校の外。日曜日のこの時間に食堂は開いてないから、必然的に、裏門の正面に居を構える文房具店兼雑貨屋、佐々木屋の脇の自販機しか選択肢はない。

「なに飲むかな～」

そんな何気ない独り言を口にしながら、タクミの頭は別の事で埋め尽くされてしまっていた。

鷲尾輝。白鳥巧。琴月茜。

この三人の、仲良くやってきた、幼なじみの関係をいかにして終わらせるか。幼稚園から続いてきたお友達をどうやって男と女に分けるか。

タクミの頭は、それをここ数ヶ月ずっと考えてきた。

きっかけは、中学三年になった時のこと。最初のＨＲで担任から渡された進路希望の用紙だった。

三人が通う中学は中高一貫のカリキュラムを取っているが進学校の側面も持っており、県の内外を問わず、高校進学時に外にでるも

のも少なくない。

タクミはそこまで成績の良い生徒ではなかったし、進路で頭を悩ませる事もないと高を括っていた。このままエスカレーターに乗っていればいいのだ。

しかしヒカルとアカネはそうはいかなかった。ヒカルは学年で十本の指に入る成績だし、アカネは自慢の吹奏楽で県の優秀奏者オーケストラに二年の時から抜擢されている。外に道を見いだしてもなんの不思議はなかった。

やんわりとその話を二人に振ったとき、共に笑って、外には行かないと言っていた。

ヒカルは勉強なんてどこでもできると、アカネは別に名門校行って音楽漬けになりたいとも思わないしと、即答だった。

別に二人の力を伸ばすために外に出るべきだ、とはタクミは思わない。そんなことは、二人の意思が決める事だ。だが、逆にいつまでも三人仲良く同じ道を歩いていければなんて子供じみた事も思っていない。

ただ、それまでは意識してなかったいつか来る分岐点の、いつかがもしかしたらそう遠くないものなのかもしれないと思った時、ひどく考えさせられたのだ。

道を違えても、離れ離れになっても友情そのものが消えるとは思わない。寂しくは成るがそういうものだろうとも、そもそもそんなもので消えてしまうのは本当の友情じゃないとも思う。

だから、身近な関係にすがりたいわけではない。ヒカルが本気で勉強を、アカネが本気で音楽を究めるというのなら、笑顔で送り出してやりたい。

しかし、この想い。幼馴染の関係に深く根を張った三角関係に決着をつけないことだけは、どうしても我慢成らなかった。

親友の想い人を、自分はどうしたいのか。タクミはその疑問に実は、今も答えを出せずにいる。

アカネは、どちらの告白であっても受ける気がするし、どちらの告白も受け無い気もする。その辺りはわからない。

しかし、その結果がどうあれ、どちらか片方が告白をすればもう片方は、その機会を永遠に奪われると思う。巧くいけば無論のこと、巧くいかなくとも、その後に行われる告白が、する側にとっても受ける側のアカネにとっても、真摯な好意のやりとりだけに成るはずはないと思うからだ。

だから、チャンスを与えられる枠は一人分だけ。二番手にはリングに上がることすら許されない。

それこそがタクミの頭を悩ませているのだった。

先陣を切った方にだけ許される一度きりの契機。それはすなわち親友の機会を奪った上でのみ成り立つ事を意味している。

そんな機会をタクミは、譲る気もなかったし、そしてそれ以上にヒカルに譲られる気もなかった。

恐らくヒカルも、そして、アカネですら、おおよそ同じことを考えていたに違いない。だからこそ、三人の間で、その手の話題が飛び交うことは少ない。

「まったく、難儀な話だ。幼馴染三人の三角関係なんてな。マンガかっつうの」

来週には期末テストがある。そしてそれが終われば待望の夏休みなのだが、その前の関門が厄介だ。

期末テストの評価などを始めとして、生徒の状況を叩き台にした、進路相談がある。そのままエスカレータから降りないものにとっては気楽な夏だが、外に道を見出すものにとってはそうはいかない。

つまり分岐点は来年の四月でもなければ、受験本番の二月でもない。勿論推薦入試やＡＯ入試が本格化する秋から暮れでもない。

分岐点は来週。しとしと降り続く梅雨が開け、入道雲が青空に白い帆を張り始める夏の始まり。

タクミは三角関係を解消するリミットもそこだ、と考えていた。

そこを超えて初めて、三人の内の一人としてではなく、自分自身で先のことを考えられると思うからだ。ヒカルも、アカネも、そしてタクミも。

タクミはそうやって考えた末に、ある賭けにでることにした。そう、タクミは自分で決められない問題を天に投げた。

：4

「あれぇ！？　タクミじゃん！！」

人気の無い夕方の校舎に響く爛漫な声。それは女子生徒のものだった。

不意に声をかけられたタクミはくしゃりと顔をしかめた。

すぐさま、笑顔を作り直し、後ろを振り向く。

「お、アカネ！」

アカネと呼ばれた女子生徒。ヒカルとタクミの幼馴染でもあり、三角関係の頂点に存在する琴月茜は、タクミが昇降口へと歩いていた廊下の反対側、音楽室などがある第二校舎とつながる渡り廊下の曲がり角でタクミに手を振っていた。

そして、そのまま小走りにタクミへと駆け寄ってくる。セミロングの艶の良い髪を振り乱し、小柄な体を跳ねさせるように駆け寄るアカネの姿を、いつもは眩しいはずのその姿を、タクミは暗澹たる気持ちで見ていた。

タクミは、心中で目論んでいた賭けに負けたのだ。勿論そんな事はおくびにも出さないが。

「どうしたのよ、タクミ？　なんで日曜のこんな時間に学校に居るの？」

「アカネは？　練習？」

「そ！　ほら！」

そういって肩に下げていたケースに入ったトランペットを突き出してみせるアカネ。

「で？　タクミは？」

「ん？　ジュース買いにいくとこ」

「あー、佐々木屋？　って！　違うでしょ！」

軽口の押収はタクミとアカネのいつものコミュニケーションだ。これに「コントしてないでさっさと本題に入れ」と口を挟むのがヒカル。何年も続けてきた会話だった。

「実はな。ちょっと下手って木村に目つけられたんだよ」

昨日の晩タクミを捕まえ、今日の強制労働を言い渡した生活指導の木村義孝の名を出しながら、涙声を出しオーバーなアクションで説明するタクミ。

「キモキムに？　マジで！？」

そう言いながら露骨に嫌な顔を浮かべるアカネ。

木村は男女学年関係なく嫌われている教師のトップランカーだ。会話に出てくれれば、不穏な気持ちを覚えるのも当然だった。

「そ。まぁ、俺が下手打ったのもあるんだけどさ。いやぁ、ヒカルには悪い事した」

「え？　じゃあ、ヒカルも居るの？」

そう驚いたアカネの声に嬌色が混じっていたように感じたのは、タクミが卑屈に考えすぎたゆえだろうか。

「あぁ。今は２－Ａに居るよ。も少し残ってやんなきゃいけないことあるからさ」

「ふぅーん。何？　やらなきゃいけない事って」

「笹作り」

「ササヅクリ？」

「そう、笹作り」

「なによ、ササヅクリって？」

小首を傾げながらタクミの目を覗き込んでくるアカネ。

なんでコイツは一々こう可愛いのだろうか。畜生。

「笹だよ。竹。バンブーの奴。フェイバリットオブパンダ」

「あぁ、お団子？」

「アカネ、笹と言えばイコール笹団子なの？」

「うーん、そういわけじゃないんだけど、」

そう言うアカネの言葉を遮って、ある音が響いた。

「ぐぅ～きゅるるるぐぅ～」

まるで瞬間湯沸かし器のように紅潮するアカネの頬。信じられないと言う表情で、音の出所、自分のお腹を睨み、続けて、タクミを睨む。

「聞いた！？」

「そりゃ聞こえるだろう」

苦笑いする事しかできない。男のタクミからすれば微笑ましいアクシデントでしかなく、反応も含めアカネの魅力が溢れた一端なのだが、乙女にとってはそうも言ってられないのだろう。なんとなく理解は出来る。共感は出来ないが。

「もぉ～～！！」

何処にぶつけてもいいかわからない怒りを抱えて赤面するアカネ。

「そっか、練習明けだもんな」

午後の早くから、作業のＢＧＭになっていた吹奏楽の練習を思い出す。以前アカネから聞いた話だが、半日もトランペットを吹くというのは結構な重労働だそうだ。そりゃあカロリーも消費するだろうし、お腹も鳴るのだろう。

「そうよ、練習明けなの！　お腹も空くの！　笹団子を思い浮かべちゃうの！」

「あぁ、わかったわかった。そんなに必死に弁解しなくても分かってるって」

アカネをなだめて、話題を逸らす。

「で、何飲む？　買ってってやるから教室で待ってろよ」

「え？　いいよ、佐々木屋でしょ、あたしも行く。なんか食べたいもん」

タクミは少しだけ、語気を強めた。そうはいかないからだ。

「あ～、いいっていいって、どうせ胡麻アンパンだろ？　一緒に買ってくから」

「え？　なんで？　タクミ今日なんか気前いいじゃん？」

アカネが、全部買ってくるというタクミの言葉をいぶかしむ。

その疑問は当然だった。この時タクミには思惑が一つあったのだが、それはアカネの知る由ではない。

「あったりまえじゃん、労働を頼むんだから」

タクミはわざと憎たらしい笑みを浮かべてやる。

一瞬、きょとんとした表情を浮かべたアカネだったが、一拍置いて、肩を落としながら深く息を吐く。

タクミは、アカネに、笹作りとしか言っていない。だが、改めて細かい説明が必要な仲ではなかった。木村に捕まり、厄介ごとに巻き込まれている。それだけで充分だった。

アンパンとジュースを駄賃に、タクミがあたしを厄介ごとに巻き込もうとしている。しょうがない、この優しいアカネさんが助け舟を出してやろう。きっとアカネはそう思っているに違いない、とタクミは踏んだ。

「しょうがないわね。このアカネさんが助太刀いたそうか」

トランペットのバッグを肩に担ぎなおし、小さい体で胸を張り尊大に振舞ってみせるアカネ。

「あぁ、頼むよ」

ほらな、とタクミは思いながら、しかし、暗い気持ちが心中をよぎる。踵を返し、オレンジ色の廊下に消えていくアカネの背を見守りながら。

：5

アカネの優しさは眩しかった。

その光に照らされて生まれる影が怖かった。その暗がりに自分がぽつんと立っているのではないかと思うからだ。

いつも当たり前に恩恵にあやかり、信頼をしているアカネという娘に、自分はいつも迷惑をかけてばかりではないのかという鬱々とした感情がタクミを襲う。

ヒカルとアカネと自分の三人を男と女として並べてみると、いつもそんな思いに駆られる。おちゃらけて、誰かに迷惑をかけることも多く、コレといった長所も無い自分がアカネと一緒に居る事なんてと卑屈な想いが湧き出て止まらない。

そんな思いをヒカルなら、馬鹿じゃねぇのと言って、励ましてるんだかなんだかわかんない口調で叱咤してくれるだろうか。

そんな想いをアカネなら、何を言ってるのよと言って、笑いながら、そんな弱気で、と叱りつけてくれるのだろうか。

そんな彼らに、なんてな、と言って、心の底から笑顔を浮かべ、肩を、自分は並べられるのだろうか。

葛藤がタクミを襲う。

だから。だからこそ、今の自分のあり方に。自分たちのあり方に、何か一つけじめのような物が欲しかったのだ。

そんな思いで、密かにタクミは賽を天に預けていた。ヒカルに出てくると告げ、教室を後にしたときだ。

花びらを一つ一つ数えていく下らない恋占いと一緒。なんの根拠も必然性もない賭け。

廊下でアカネに出会わなかったら、告白する。出会ってしまったら機会をヒカルに譲る。

休日の、それも日が暮れ始めた時間。人気の無い校舎で、吹奏楽部の練習も終わってしばらく経ったこんな時間に、アカネと出会うことがあるだろうか。

アカネが居ないのなら、ジュースを買って帰り、ヒカルに自分のアカネへの懸想をカミングアウトするつもりだった。アカネを渡すつもりは無い、と一言告げるつもりだった。それがタクミの賭けである。

しかし、アカネは現れた。天真爛漫な可愛い笑顔を下げて、タクミに手を振って近づいてきた。

果たしてこの賭けは分が良かったのか悪かったのか。考えていた時も分からなかったし、今もどうだったのか、タクミには分からないままだ。

日中作業してる間、ずっと吹奏楽部の演奏が聞こえていたから、部活の練習があることはわかっていた。だが、アカネが来ているかどうかまでは知らなかった。日曜の練習は強制でないことも、アカネが学外の演奏会にたまに出席してることもタクミはアカネから聞

いていて知っていたからだ。

だが、逆に、アカネが練習に来ているのであれば、これくらいのタイミングで、廊下で出くわすかもしれないとも考えていた。教室に吹奏楽部のＢＧＭがなくなったのは、数十分前だ。演奏を止め、楽器を片付けるなり何なり、ミーティングやら何やら。大体、練習が終わってから、部員たちが、音楽室をあとにするまでのどれ位の時間がかかるかはよく知っていた。

練習終わりにアカネと一緒に帰ったことも少なくない。もちろん、ヒカルも一緒な事がほとんどだったが。

アカネが居ても、おかしくない。居なくても、おかしくない。今はそんな状況だった。

タクミはそんな不確かさにもたれた。

とにかく、自分でどれだけ悩んでも決められない決断を自分の与り知らぬ何かに託したかったのかもしれないし、考えたくはないが、もしかしたら、告白する勇気の出ない自分の言い訳を転嫁したかっただけかもしれないとも思う。

答えは出ない。しかし、そんなタクミの気持ちなどお構いなしに賽は振られた。

あと、するべきはけじめをつけることだけだ。

「おーい！」

小さくなっていく背中にタクミは声を掛けた。

：6

日が傾き、窓から太陽が差し込まなくなった教室。ヒカルは教室の隅へと行き、電灯のスイッチを入れた。

パツパツ、と音を立てて、夕暮れの教室に光が点る。

「よっ」

ヒカルは教壇に飛び乗り、腰を下ろす。足をブラブラと放り出し、右手はくるくるとペンを回している。

何も書かれていない黒板をぼんやりと見つめながら、ヒカルの頭の中は、先ほどのタクミとのやり取りで一杯だった。

タクミの言うとおり、ヒカルはアカネのことが好きだった。

幼稚園の頃からの付き合いだ。いつから異性として意識し始めたかなんて、覚えては居ないが、いつの間にか、アカネの事を好きになっていた。

アカネの事が好きなのだと気づいたとき、ヒカルは、当たり前か、と妙に自分の心情に納得したことを覚えている。

アカネは魅力的だ。これまでも仲良くしてきて、これからも仲良くしていく。それほど傍に居る異性に想いを抱かないはずも無いかと、変に冷静に思った事を覚えている。

タクミの言った事で間違っているのは、自分が、アカネと付き合

いたいと思って居る、と言うことだった。

だからこそ、タクミの言動が理解できなかった。今まで、一度たりとも、ヒカルの中で、アカネへの好意とアカネと恋人同士になると言う関係性は一致したことが無かった。

アカネのことは好きだ。しかし、アカネは自分と幼馴染なのだ。そして、自分はタクミとも幼馴染の親友で、もちろんアカネとタクミの間柄だってそうだ。

好き、であることと、付き合う、という事は、イコールではない、とヒカルは思う。今まで、誰かと付き合った事など無いヒカルは、恋愛の何たるかを語るなんて気持ちは無かった。しかし、自分の心の中は自分で語れるだろうとも思う。

ヒカルにとっての好き、は、付き合いたい、ではないのだ。

「どうしたいんだよ、タクミ」

ヒカルの中で好きと付き合うが符合しなかったのは理由がある。決して付き合いたくないと思っているわけではない。ヒカルが、付き合いたいとならないのは、それより優先するものがヒカルにはあり、それはアカネと付き合ってしまうことで壊れてしまうものだと考えていたからだ。

ヒカルは、なにより、三人の関係性を壊したくなかった。

幼稚園から一緒に仲良くやってきた、三人。鷲尾輝。白鳥巧。琴月茜。この三人の関係性こそが、ヒカルにとってなにより優先すべきものなのだ。

ヒカルは、自分を人付き合いの下手な人間だと思っていた。自分の感覚と、周囲の感覚に齟齬が生じることがとても不愉快に感じられるのだ。

どうして、そんな性格に育ってしまったのか、自分にもわからないが、ヒカルは、そんな自分の、言うことのきかなさが好きではなかった。孤独であることに良いことなんて無いとも思う。でも、自分が思いつくことと、多くの友人たちが思いつくことは大抵一致しない。皆と、同じ考え方が出来ない自分もそうだし、精一杯皆の考えに合わせて行動してる時に、心の何処かで不快感を感じている自分も嫌いだった。

そんな、幼く、歪な自分の居場所、周囲への窓。それがタクミやアカネと一緒に居る時間、空間なのだ。

カップルと一人の男。そんな三人組があり得るだろうか。ヒカルがアカネを好きでなかったら。タクミがアカネを好きでなかったら。もしかしたら、そんなこともあり得たかもしれない。でも、そうはならなかった。ヒカルとタクミは少年から青年になり、傍に居た少女を、一人の異性として捕らえ始めてしまったのだ。

だからこそ、かき回すことなどしたくなかった。

タクミは、そんなヒカルの思いを知ってか知らずか、心の中に踏み込んできた。アカネの事が好きなのだろう、と。

そんなことは、お互いに知っていたことだ。でも、これまで、一度だってそんな事は口には出さなかった。言葉にして、互いに認識してしまったら、それはもう目を背けることの出来ない何かになっ

てしまう気がしたから。三人の中に亀裂を生む楔になってしまうかもしれないと恐れたから。

答えのない問いが、ヒカルに立ち込める。目の前の濃紺の黒板が、えも言われぬ威圧感をかもしている気がした。

左手を、そっと、ポケットに偲ばせる。そこには、タクミが勝手に書いて勝手に笹に結んだ短冊とは、別のヒカルの短冊。それは書きかけのヒカルの本当の願いが書かれた短冊だ。

「どうすれば、いいんだよ」

ヒカルの呟きが誰も居ない教室に落ちた。

:7

パタン、とロッカーの閉まる音が、人気のない廊下に響く。

タクミと別れた後、アカネは、ヒカルが居ると聞いていた教室には向かわなかった。

「タクミが変なこと言うんだもんな〜」

今日の練習で使ったスコアブックを、ロッカーにしまったアカネは、ひとりごちる。

佐々木屋行くという、タクミと分かれた後、しばらく廊下を歩いていると、タクミに声をかけられた。振り向くと、そこは薄暗くなり始めていた廊下で、その為タクミの顔は伺えなかった。なにかな、と思っていたら、タクミの声だけが廊下に響いた。

「なによ、ヒカルから大事な話って」

タクミはそう大声で伝えると、なんのことか聞こうとしてる私をそっちのけでとっとと佐々木屋へと行ってしまった。まったくなんだというのだ。

とにかく、アカネは、そんななにか思わせぶりなタクミの台詞を聞いて、足が遠のいていた。別にわざわざ、ロッカーにしまわなくてもいい楽譜を自分の教室にまで持ってきたりしたのはそういう訳だ。

ヒカルと顔を合わせづらい理由。タクミの意味深な言葉ももちろ

んなのだが、それを意味深に感じてしまうような出来事がつい先日あったのだ。

それを思うと、アカネは自然とため息が漏れる。そして、頭も痛くなる。さらに言えば、お腹がすいている。胡麻アンパンと、チビチョココロネもお願いすればよかったなぁ、と思いながら、アカネは重い足を２－Ａへと向けた。

アカネの悩みは、先輩として、パートリーダーとして、幼馴染として、様々な一面で異なった考え方が出かねない難問だった。

「琴月先輩って、鷲尾先輩と付き合ってるんですか？」

吹奏楽部の後輩、二年の藤倉さとみはそれはもう直球で、そう聞いてきた。練習の合間、ちょっと相談があるんですけど、と音楽室の隣に構えられた、音楽準備室にわざわざ呼び出してだ。

アカネは、相談があると言われた時、当然、演奏のことだと思った。なぜならその時は、休憩中とは言え、部活の練習時間内であったし、アカネはトランペットのパートリーダーを務めており、みさとは同じパートのサブリーダーだったからで、さらに言えば、さとみがサブリーダーに任命されてから2ヶ月余り、一年生のパート分けが済んで、少しずつ問題が出てくるころだと、アカネが去年サブリーダーを勤めた経験から知っていたからだ。

パートリーダーは、主に他のほかのパートや指揮者との折衝にあたり、パート内の指導はサブリーダに任されることが多い。母親が音楽の教員であることも幸いしてか、さとみは演奏は上手であったが、その小さい体に似合わないほどの強気な性格で、一年生たちの指導に難儀してるのかもしれない。

だから、古い楽譜が詰められたくさん積まれたダンボールの一つに腰を落としたアカネは、なるべく笑顔でやさしく後輩に声をかけた。「相談ってなぁに？　さとみちゃん」、と。

そこにさとみのストレートだ。アカネは、バットを振ることも出来ず、見送る。何が起こったのかもわからず、思わず、キャッチャーのミットを見てしまうかのように、言葉ですらないない様な一言が漏れる。

「へっ？」

そこにさとみはもう一球。しかも恐れを知らないど真ん中。切れのいいストレートだ。

「鷲尾先輩ですよ。琴月先輩よく一緒に帰ったりしてるじゃないですか？　付き合ってるんですか？　私、鷲尾先輩のこと好きなんですよ。だから、琴月先輩はどうなのかなって思って」

「え、えっと、ヒカ、あの、鷲尾君？」

かろうじてバットは振ってみるが、動揺は隠せない。もちろんボールは危なげもなく、ミットへ。これでカウントはノーツー。追い詰められた。

「付き合ってないんですか？　え、だったら、白鳥先輩と？　白鳥先輩とも一緒にいますよね、よく」

「えっと、あのね、さとみちゃん。話が全然見えないんだけど」

ノーツーからの一球を、なんとかバットにかすらせて粘るアカネ。

「えっと、そうですね。あの、先月の全校オリエンテーションあったじゃないですか？　あの時あたし、クラスで委員に選ばれちゃって」

そういえば、先月、さとみちゃんは委員会があると、部活を何度か休んでいた気がしたな、とボンヤリと記憶を辿る。そして、同時に思い出す。うちのクラスのオリエンテーション委員が誰であったかを。

「で、鷲尾君が居た訳ね」

「そうなんです。委員会って、A組ならA組ならで一年二年三年って、縦割りで色々話し合うんですけど、鷲尾先輩、超テキパキ仕切ったりとか、あとは、みんなが、どうしたらいいかなかなか決められなかったところとかも、スパッて意見とか出してて、もう凄くかっこよかったんですよ」

急に饒舌になりヒカルの良さを語りだすさとみの様子に、少したじろぐも、アカネはなんとなくさとみの言う状況が目に浮かぶようだった。そして、それをそんな風に好意的に捉える人も居るのだなと、変に感心してしまっていた。

なぜなら、さとみの言ってる姿は、アカネはもちろん、ヒカルでさえ自覚し、あまり良く思っていない、ヒカルの、いわば短所だからだ。

想像するだに、ヒカルはかなり意見をごり押ししたのではないだろうか、と少し思う。言葉遣いは丁寧だが、それがかえって、冷た

い印象を与えがちなのはヒカルの第一印象としてよく指摘されがちなところだ。

ヒカルが委員会の仕事に乗り気でなかったことは明白だ。委員会を決める際に、他薦されながらも最後まで渋り、結局じゃんけんで負けたことによって選出されたのだから。自分の出したチョキを呪い、忌々しげに右手を見つめていたヒカルの顔が記憶の中で浮かび上がる。

となれば、ヒカルの考えることなど、一つだろう。アカネにはわかる。委員会などとっとと終わらせて帰りたい、だ。

聞けば、ヒカルと、もう一人のうちのクラスの委員、沢木さん以外は下級生だけだったようだし、ヒカルも遠慮せずに意見を押し通したのだろう。

「まったくあいつったら」

「え？　何ですか？」

アカネは目に浮かぶような光景につい、ヒカルへの叱咤が口をついてしまった。さとみに問いただされ慌てて、取り繕う。

「あぇ？　えっと、うん。なんでもないわ。それにしても、さとみちゃんが鷲尾君をねぇ」

「それで、どうなんですか？　琴月先輩。鷲尾先輩と付き合ってるんですか？」

「な、ないわよっ！　付き合ってるとか。ホント、ないから付き合

ってるとか、別に好きでもないし、た……」

そこまで否定して、アカネは、続く、単なる幼馴染だから、という言葉を飲み込んだ。

さとみがじっとアカネの言動を見つめていたのもあったし、ムキになって否定することに急に恥ずかしさを覚えたからだ。

なによ、あたしったら、これじゃまるで照れ隠しみたいじゃない。そんなことを思い語尾を濁し、さとみから視線を逸らしてしまうアカネ。

そんな、アカネの不自然な態度にさとみは気づいていなかった。すでに心は此処にあらずだったのだ。

「ホントですか！！　良かったぁ！！　先輩と恋敵なんて気が引けちゃいますもん。色々悪いですし」

その物言いは、振られる事など前提に無い様だった。そんなさとみの自信にアカネは呆れるどころか、感心してしまう。

「これで、心おきなく鷲尾先輩に告白できる！　やった！」

心底嬉しいのだろう。さとみは満面の笑みをたたえていた。それは部活の場では見せた事のない笑顔だった。まなじりに僅かに光った輝きにアカネは気づき、慌ててさとみから視線をはずす。目の前の恋する乙女のパワーの様なものに当てられてしまったのだ。

想いを告げられる事が、涙を流すほど嬉しい事なのか。さとみのように、まっすぐ誰かに恋をした事のなかったアカネはその輝きに

圧倒されてしまう。

恋をするってそんなに楽しいのだろうか。

アカネは今まで、あまりそういったことに気を揉んだ事がなかった。楽器が恋人、等と言うつもりもないが、何かあれば常に音楽と共にすごしてきたし、異性との付き合いといえば、ヒカルとタクミくらいか、同じ部活の男子くらいのものだ。

確かに、さとみの確認は邪推でも何でもないなとアカネは思った。はたから見られたらそう思われなくもないかもしれない。それぐらいヒカルとはよく一緒に居る。今思えば、クラスの女子の間でそういった話が話題に登らない日はない。自分が少し周りからずれて居ただけの事で、皆、恋愛に関するアンテナを張り巡らせているのだろう。

そんな中で、二人で一緒にお弁当を食べていれば、それは勘違いもされるというものだ。アカネにしてみれば、ただ単純に、ヒカルのお母さんの作る玉子焼きが目当てなだけなのだが。そもそもタクミ抜きで二人でお弁当を食べるのだって、せっかくお母さんがつくってくれたお弁当があるにもかかわらず、空のランチトートだけ持ってきて、肝心のお弁当箱を家に忘れてきて、結局佐々木屋でパンを食べるなんて事を、タクミがしょっちゅうするからだ。

ふと、アカネは違う可能性にも気がついた。私とタクミは？

タクミも、人好きのする人気者だ。分け隔てなく誰に対しても明るく、スポーツも得意なお調子者。どこかに密かにタクミを狙う女子も居るのかな。そうだとすれば、タクミとも誤解されてたりするんだろうか。

二人とは幼馴染だ。付き合ってなど居ない。三人そろって仲良しであった幼稚園の頃から、今まで、その関係性は地続きのままだ。きっとこれからも。

「先輩、応援してくれますよね」

さとみの声が、アカネを我に返らせる。

「へ？」

「やだなぁ、先輩。可愛い後輩の恋路ですよ、応援してくれなきゃ、なーんて」

「あぁ、そうね。うん。大丈夫だよ、きっと！　さとみちゃん、可愛いもの！」

とっさに口をついて出た言葉に、アカネは後悔を覚える。心に一瞬だけ苦くて重いものが広がる。

「ホントですか！？　先輩に可愛いって言ってもらえるなんて、自信出ます！　頑張りますね、私！」

そう言うと、さとみは、早々に話を切り上げ、音楽準備室を後にして、跳ねるように駆けていった。

その背を見送りながら、アカネは、自己嫌悪に陥っていた。

：8

あの時。

嬉々と、ヒカルのかっこ良さを語るさとみの話を聞いている時。アカネは、本当のヒカルはそんなんじゃない、と。ヒカルの本当の心中がわたしならわかる、と思っていた。

あの時。

さとみに「応援してください」と言われた時。アカネは、目を輝かせ自分の恋心にまっすぐであろうとしていた後輩を素直に応援する気持ちになれなかった。

あの時。

「大丈夫だよ」と、後輩の気持ちを後押しする言葉を口にしてしまった時。きっとヒカルはこの娘の想いには応えないのではないかと思っていながら、適当な励ましをしてしまった。

「私って嫌な女だな」

荷物をロッカーに置き、身軽になった体で、アカネは暗がりの廊下を歩く。日曜日の校舎は、先生や校務員の人が、適当なタイミングで電気を点けてくれることなど無いから、日がくれてしまえばこんなモノだろう。

明るくなくてよかったな、と思った。後ろめたさでもなんでもだが、心がささくれ立って居るような時は、周りが暗いほうが落ち着

く。

自分の言動を振り返っては、暗澹たる気持ちが広がるのを止められない。そして、なにより、なぜ、自分があんな風になったのか、それがアカネにはわからなかった。

ふと、廊下に指す明かりが目に留まる。教室から漏れ出る光は、黒の廊下を平行四辺形に白く切り取っていた。

ヒカルに、会いたくないな。アカネはそう思った。

ただでさえ、さとみちゃんの件もあって、タクミの言う、ヒカルの大事な話が何かは分からないが、もともと気は進んでなかったのだ。思い出し落ち込み真っ最中な今ならなおさらだ。

教室の手前で足を止めたアカネを迎えたのは、ヒカルだった。

廊下を照らす教室からの明かりが歪んだと思ったのもつかの間、ヒカルが廊下に出てきた。

「ったく、タクミの奴、佐々木屋いくのに、どんだけ時間かかってんだよ」

そう言いながら廊下を見渡すヒカルと、アカネの視線が交錯した。

「お、アカネ」

「よ、よっす」

自分から飛び出した、上ずった声にアカネは驚くが、ヒカルは気

に留めなかったようだ。

「どうしたんだよ、こんな時間に、……って部活だよな。聞くまでもない」

そう言いながらヒカルは廊下に飛び出した半身を翻す。

「むしろ、こっちがなんで休みのこんな日にって話だよな。ホラこれだよ」

ヒカルは手招きしながら、教室へと戻って行く。アカネは、意を決してヒカルのあとに続いた。

「うっわっ、これ全部二人で？」

ヒカルのあとに続き、教室に足を踏み入れたアカネの目に飛び込んできたのは、教室の後ろのスペースを埋め尽くす様にずらりと立てかけられた笹の数々だ。

「え？　なに？　なんで知ってんの？　もしかしてタクミに会った？」

「んー。部活終わって、昇降口行こうとしてたら、ねぇ。うっわ、すごい、これ全部手作業で？」

アカネは並んだ笹を見て歩く。脇には何名分だろうか、短冊が積み上げられていた。

ふと、束になった短冊の脇に、数枚散らばった短冊が目に留まる。脇にはペンと、丸められた紙くず。

「まったく、はた迷惑な話だ。聞いてるか？　タクミから」

「ううん。細かくは。キムにとっ捕まったって位」

「あいつが、だけどな。俺は単なるとばっちりだ」

ヒカルが、その机のペンを手に取り、机に腰を下ろしてペンまわしを始める。

「天文学部の部室に忍び込んで、望遠鏡をかっさらおうとしたんだとさ。あいつ本物のアホだな。とんだとばっちりだよ、まったく」

「タクミらしいね」

そして、それに付き合うヒカルもヒカルらしいなと思う。スカートを抑えながら、ヒカルの向いの机の椅子に腰をおろす。

ヒカルは、基本的にぶっきらぼうだが、私やタクミにはやさしい。幼なじみだからだ。ヒカルは人を別ける。明確な線引きがあるのかは聞いたことがないが、とにかく別ける。内と外とでだ。

さとみちゃんはヒカルに告白するという。それは、ヒカルの内側に入るということだ。私やタクミに向けられている優しさが、さとみちゃんにも向いてしまうという事だ。

私は、なんとなく、自分の気持ちに気づいていた。さとみちゃんの目を真っ直ぐに見れなかった理由。

それは、嫉妬だ。

「なぁ、折角だし、短冊書いてみないか？」

ヒカルが、ペンをこちらに向けながら聞いてきた。脇には積まれた短冊。その一枚を取り、ペンと共に渡してきた。側にあった丸められた紙くずが見当たらない。さっきまで、あった気がしたけど、いつの間にかヒカルが捨てたのだろうか。

「短冊？　願い事、か」

アカネは少しうつむき、少し考えると、ペンと紙をとった。

：9

目の前には背中を丸め、机に向かうアカネの姿。

アカネは、俺の、短冊を書いてみないかという呼びかけに、しばし、視線を彷徨わせていたが、何か思い至ったような顔を見せると、何かを書き始めた。

そんなアカネの姿を見ながら、俺はポケットに丸めて突っ込んだ短冊を、右手でもてあそんでいた。机の上に放っておいたのを、アカネに見られるかも、と慌ててポケットに突っ込んだのだ。

願いを込められながらも、無残に丸まった紙片は二枚。一枚目は、タクミの書いた短冊だ。「琴月茜と付き合いたい」と書かれたもの。もう一枚は、俺の書いた物。タクミがジュースを買いに行くと出ていってしまい、独り取り残された夕暮れの教室で、自分の心を見つめ直そうと書いてみたものだ。

「琴月茜と、」とまで書いたあと、筆が止まった、書きかけの短冊。

書きかけた短冊を前に、どれくらいの時間ペンを握って固まっていたかはわからないが、結局、俺は自分がどうしたいのかという問に答えを出せずにいた。

タクミが、代筆した様に、付き合いたい、と書くことはできなかった。

アカネのことは好きだし、付き合うということが恋心の延長線上

として、ごく自然な発想だということも理解できなくはない。そして、そんな事を悶々と考えるうちに、タクミがどうして、こんな話を切り出したのかという心理も少しわかってきていた。

でも、それば分かればこその、踏ん切りのつかなさだった。

選択の恐怖。何かを選ぶということは、選んだ方でない方を選ばなかったということになる。もし、仮に、アカネと付き合いたいという想いが自分の中で形になったとして、それを躊躇わせるのは、それと二者択一にある思い。自分と、周りをつないでくれている、タクミとアカネと、これまでやってきた三人の絆を大事にしたいという願いだった。

「なぁ、アカネ」

「ん〜？」と帰ってきたのはアカネの生返事。「もう、なに、このマッキー潰れてるじゃん、ペン先」

アカネは、書きかけた字が気に入らなかったのか、今まで書いていた短冊を丸めると、脇に放り、積まれた短冊から新たな一枚を引きぬく。

俺は腰掛けていた机に転がってる、ゲルインクのボールペンをアカネに渡してやる。

「サンキュー！　って、うぎゃ、なにこれ、なんかインクがヌルヌルして超、文字滲むじゃん！！」

「なに？　アカネ、その手のボールペン使ったこと無いの？」

「無いよ、こんな変なペン」

「変じゃないよ、書き味が柔らかくていいだろ？」

アカネは、先ほど丸めた短冊を広げると、グリグリとペン先を当て、書き味を試している。女の子のくせにと言っていいのか、アカネは字があまり上手ではない。俺が思うに、筆圧が強すぎるのが原因な気もするのだけど、アカネが冗談めかして言うには、ラッパ吹くのに字など巧くなくても良い、のだそうだ。

男の字と間違われるほど、強い筆圧で、やたらとゴツゴツとした字を書くアカネは、ようやく、ゲルインクのペンの書き味に馴染んだのか、意気揚々と新たな短冊に向かった。

短冊に向かいながら、アカネが口を開いた。

「願い事ってさ、いろいろあるじゃん？　ハンバーグ食べたいとか、大金持ちになりたいとか、期末の数学の山が当たりますようにとか、さ、色々」

「随分即物的だな」俺は、アカネの奔放さに、思わず笑みがこぼれた。

アカネは、そんな俺の態度に、怒り半分照れ半分で、慌てて、自分の言葉を釈明する。

「ち、ちがくて、今のは例えばって言うか、そうじゃないの！」

「あぁ、わかってるよ」

「今どうしたいかとか、明日どうしたいかとか、一年後とか、将来とかさ」

「うん」

「ヒカルの願い事ってどんなの？」

「え？」

俺の応え方に、アカネは筆を止め、こちらを振り返る。俺は視線を外すタイミングを逸してしまって、アカネと正面から見つめあう事になってしまう。

「え、じゃなくてさ、ヒカルの願い事よ？　あれ？　書いたんじゃないの？」

慌てて隠した短冊は、アカネの目に止まっていたのだ。書き損じか何かと思われる、丸まった短冊と、ペンが机の上に転がっていて、さらには、書いてみないか、とまでアカネに持ちかけているのだ。アカネが俺が短冊を書いてるものと踏むのも自然な話だ。

アカネの視線が俺を射ぬく。急に鼓動が早くなっているのを感じた。耳の下あたりが熱い。内側からドクンドクンと血管が波打つのを感じた。

告白のチャンス、かもしれない。

これは抜け駆けになるのだろうか。一瞬目の前のアカネを無視して、タクミの顔が過る。今もし仮に、俺がここで、想いを告げたとして、もし仮にアカネがそれを受けたとして、そうしたらタクミは

どうなるのだろうか。想いを告げる機会すら永遠に失ったまま、タクミは三人の絆から放り出されてしまうんではないだろうか。二人と一人、歪な三角形になってしまう気がして、恐怖が募る。

俺は口を開けなかった。

「あのね、ヒカル？　変な意味じゃないだけどね、えっと、今、好きな人っている？」

俺の返事を待たずして、アカネが口を開いた。

そのセリフで、早鐘の様になっていた、俺の心臓が今度は、一瞬止まった。

「ええ？」

またも、間抜けな、声が俺の口から漏れた。アカネは何を言ってるんだろう。俺に好きな人が居るのかって、聞かれても、はいあなたですとは、俺は口が裂けても言えない。なんで、アカネがそんなことを訊いてくるのかがさっぱりわからないから、なんと答えていいのかもわからない。

「あ、ごめん、やっぱ、嘘。今の忘れて、うん。間違い。えっと、あのね、最近ね、ちょっとだけショッキングなことがあったの。で、えっと、あの、あたし自分を見つめ直さなきゃなって思ってた言うか、あれ、あたし何言ってんのかな」

身振り手振りを混ぜ、急に饒舌になるアカネに、俺はますます付いて行けなくなる。これは今、なんか、いい雰囲気なのか、そうじゃないのか。タクミへの思いも忘れて、必死に混乱を収めるために、

アカネの言葉を理解しようと努める。

俺は自然と、言葉の意味をすくい取ろうと、前のめりになっていたのだろう。急にアカネが、こちらの態度に驚き、目を逸らしてしまった。そんな態度が照れ隠しのように見えて、急に、アカネへの愛しさが込み上げて来た。

「ほら、あたしさ、音楽ばっかだったでしょう？　字とかも下手だしさ、いっつもタクミとかヒカルとかとつるんで、遊んだりとかさ。だからヤッとんにも三兄弟とか馬鹿にされるしさ」

ヤッとん。矢島は、小学生の頃、五、六年とアカネとクラスを同じくした同級生だ。俺やタクミに混ざって遊ぶアカネを男勝りだとよくからかっていた気がする。今にしてみれば、異性を意識しがちな年齢にあって、男女の壁を気にせず関係を結ぼうとする爛漫さを備えたアカネに恋心を寄せていたのかもしれない。冷たく当たるのは、好意の裏返しだ。

そんな矢島に、アカネは、何よ、と笑いながらドッヂボールをぶつけていたような記憶があるが、今の塩らしくなったアカネの言葉を聞く限り、事はそんなに単純なことでもなかったのかもしれない。

俺もタクミも、アカネが好きだ。異性として意識しているし、もう、好意を幼稚な反発で表すような年齢でもないので、字が汚かろうが、休み時間に楽器ケースを抱えて、全力疾走に近い勢いで廊下を駆けていく姿を目にしようが、男勝りなどと、弄ることはない。

でも、俺達以外の周りはもしかしたら、そういった目で見ていないのかもしれなかった。だからこその、今のアカネの言葉なのかもしれない。

「二年生にね、あたしのパートの子なんだけど、すっごい可愛い子が居るの。その子がね、今好きな人が居るんだって。それですっごい目を輝かせて、その話をするのよ。その笑顔がね、なんだか、とっても可愛くて、でも、ね。……見てられなくて」

アカネは言いながら語気を落としてった。見てられなくて、と口にしたあとはうなだれ、視線を落としている。

今、後輩の恋愛話をエピソードを切りだすのに、アカネはショッキングな事があったと言った。その後輩に気後れのようなものを感じたんだろうか。

「とにかく、ね」

アカネの声は消え入りそうな程、小さく儚い。

「決めたの」

「決めた？」

「うん。願い事。今のあたしの素直な願い」

アカネがコクンと頷きながら答えた。短冊を書き終え、ペンを脇に置く。

面を上げたアカネの顔には、先ほどとは打って変わった笑顔。白い八重歯を覗かせ、柔らかに弧を描いた口元と目元に、俺は一瞬目を奪われた。

「じゃん！」

アカネの笑顔に見とれていた、俺の視界に、文字が飛び込んできた。アカネの短冊だ。不慣れなペンで滲ませてしまいながらも、思いのこもった力強い字。そこにはこうあった。

「県コンクール、絶対優秀賞！！」

音楽にかけるまっすぐな想い。その文字はアカネの笑顔と一緒に、眩しく光ってる気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0238t/

夏の大三角形

2011年10月6日05時31分発行